©神奈川新聞社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

神奈川文芸賞［2022］

U-25小説部門：三菱地所横浜支店賞

たびするいきもの

／田中　鷹

イラスト／木村愛奈（県立相模原弥栄高校美術部１年）

僕は自分の翼が嫌いだ。形は歪だし、毛もごわごわしていて、色も変だ。他の人の翼を見たことはないけれど、きっと皆のはもっと綺麗で、正しい形をしているはずだ。小さい頃は左右の肩甲骨から出たちょっとした隆起というだけで、特に意識したこともなかった。違和感を覚え始めたのは中学校に入ってからだ。それはむくむくと大きくなって、硬い羽毛がまばらに生えだした。

黒板に打ち付けられるチョークの音で、僕は我に返った。油断していると、最近は授業中もこんなことばかり考えてしまう。僕は頬杖をついて教室を見回した。女子と男子が交互に座っている。中村は寝ていて、森下は机の下で漫画を読んでいる、長谷川さんは。僕は彼女の横顔を見つめ、自分の視線が無意識にその背中へ移っていくのに気づいた。だめだ。急いで窓の外へと視線を逃がす。長谷川さんに見られただろうか、恥ずかしさで首から上が熱くなる。僕は濃い青をした海と水色の空との境界を睨んだ。

ふわあ。思ったより間抜けな溜息が出てしまい、思わず口に手を当てた。今の僕にとっては海も空も翼も船も教室も長谷川さんも、ユウウツの種でしかなかった。最近覚えたその言葉をノートに書く。ユウウツ。漢字は難しくてわからなかった。心が沈んでしまうようなこの気持ちは、学校を卒業したら消えてくれるのだろうか。

この町では卒業した者のほとんどが故郷を旅立っていく。一緒に飛ぶ相手を見つけ、海を越えて安住の地を探すのだ。僕の親もその親も、そうやってこの港町を見つけた。僕らは旅をする生き物なのだ。

もう一度溜息をついた。実を言うと、僕は飛んだことがなかった。一度公園のポールの上に立って試そうとしたことがあるが、結局怖くてやめてしまった。そもそも自分の背中にこんなものがあることが不快だし、生えてくれと頼んだ覚えもなかった。僕はノートの文字を覆うように、机に突っ伏した。

「じゃあ、青木」

教師の声が響く。一瞬それが誰のことかわからなかった。もう一度強い語気でその名前が呼ばれると、僕は反射的に立ち上がった。

「は、はい」

声が裏返った。教室中の生徒が静かに笑っている。やはり僕は首から上が熱を帯びていくのを感じた。

放課後、中村や森下たちと廊下の掃除をしていた。

「なあ、お前知ってるか？　女子の羽って、すんげえ柔らかいんだってさ」

中村がいやらしい笑顔を近づけてそう言う。その吊り上がった上唇を見ていられなくなって、僕は身を引いて顔を歪めた。

「知らないし。お前それ実際に確かめたのかよ」

「いやそれは、そういう訳じゃないけど。先輩がそう言ってたんだ。俺だって実際に触れてみてえよ」

「ああ、俺も兄貴みたいに早く誰かと一緒になって、海の向こうを見てみたいなあ」

森下が宙を見ながら話に割り込んできた。森下のお兄さんはこの春に、ある市役所の職員と町を旅立った。森下の家族が見送りに行くと、市役所の同僚が大勢来ていたのだと彼が前に話していた。

「はは、普通に考えて、お前より俺の方が先だろ。あ、そもそもお前は飛べないか」

中村が森下の腹の肉を摘まみ、豪快に笑う。飛べない、という言葉に僕は一瞬どきりとしたが、すぐに森下の鋭い声で胸の騒めきがかき消される。

「うるせえ、お前みたいに下品でデリカシーのない男の方が心配だね、俺は」

暫くの間二人はじゃれ合っていた。僕は終始苦笑を浮かべ、彼らをなだめつづけた。

部活動が終わると、既に空は暗くなっていた。校門をちょっと過ぎたところに、僕は静かに立っていた。目の前には海に続く坂道があり、港には背の高い庁舎や船、灯台の灯りが森の木々のように密集している。

「青木くん」

柔らかい声に振り返ると、すぐ傍に微笑みを浮かべた長谷川さんがいた。こんな暗がりでも、頬の血色の良さが伝わってくるような気がする。

「ごめん待った？」

「ううん」

僕は大袈裟に首を横に振った。実際は二十分ほど待ったが、心の準備をするにはむしろ足りないくらいだった。

「今日は長谷川さんの番だよね」

「うん、そう。持ってきたよ」

そう言って長谷川さんは紺色の学生鞄を手探りしはじめた。

実は僕と彼女には、毎月交替で好きな本を渡し合うという決めごとがあった。もともと僕らは幼馴染で二人とも本が好きだったから、小学校の頃はよく一緒に遊んだり、図書館に行くこともあった。だけどいつからか、お互い何となく距離を感じはじめ、喋る機会もほとんどなくなっていた。「さん」を付けて呼びはじめたのもその頃だ。そんなある日、彼女が月に一回のこの時間を提案したのだ。僕は嬉しかった。書店で気になる本を見かけては胸が高鳴り、でも余計な勘違いはしないように自分の頬を叩いたりした。退屈な四週間に一度だけ、彼女の帰り道を独り占めすることが許されるのだ。

「あ、あった。はい」

長谷川さんは、カバーのない色褪せた文庫本を取り出し、僕に差し出した。礼を言ってそれを受け取ると、暫くの間沈黙が続いてしまった。教師のこと、部活のこと、誰と誰が付き合っているとかいうこと。どうでもいい話題なんて沢山あるのに、ちょうど灯台の先が目線と同じになる距離に近づくまで、僕も彼女も何も言わなかった。

「ねえ長谷川」

僕は意を決して口を開けた。今度は声は裏返らなかった。

「長谷川、さんは、卒業したらどうするの？」

長谷川さんはきょとんとした顔で僕を見る。

「どうするって、町を出てどこかに行くつもりだけど」

「もういるの？　その、一緒に旅をするひと、とか」

「うん。山内くんって知ってる？」

彼女は一拍置いて、少し声のトーンを下げてそう言った。山内。僕はその名前を反芻しながら、胸の奥が冷たく、硬くなっていくような感覚を覚えた。

「たしか隣のクラスの、長谷川さんと同じ部活の」

「そうそう！　私ね、実は今その山内くんと付き合ってるんだけど。最近は卒業したらどこに行こうかって話してるんだ。彼はとにかく海を北に進みたいって言っててね。でも私、まだそんなに飛ぶの得意じゃないし、風の少ない南西の方がいいなって思ってるの」

「そうなんだ」

海の方から風が吹いた。肩まで伸びた長谷川さんの髪が揺れ、せっかく整えた僕の前髪が問答無用で立ち上がる。冷たくなった心臓が締め付けられる感覚がした。僕はなぜか自分の恥ずかしい秘密を打ち明けそうになった。実は一度も空を飛んだことがなくて、だから飛ぶのが怖くて、そして、自分の翼が嫌いだということも。

「あのさ」

もう一度風が吹いて、そこで言葉を止めた。感傷的な気分に任せて、長谷川さんに慰めてもらおうとでも思っていたのだろうか。なんだか自分が恥ずかしくなり、同じ口の形のまま適当な質問を吐いた。

「その、町を出ていくのって、怖くないの？　だって海は広いんだよ。もし帰り方を忘れちゃったら、二度とみんなに会えないかもしれないでしょ？」

長谷川さんは思い出したかのように鞄を漁り、手帳を取り出した。開かれたページにはさっき貰った本の題名と、何行かのメモが書いてある。

「この小説にはね、ただの村の青年が、旅人として生まれ変わる瞬間が描かれているの。青年は村を出ていくことを決意するんだけど、反面その胸は不安で一杯なのね。それでたまらず、道中で村を振り返ってしまう。そしてその景色に圧倒されるの。青年は、村が二座の山に囲まれていることに気づく。まるで巨人の太い腕の中で大切に抱きしめられているみたいにね。そして山の端から漏れた鋭い朝陽に彼は目を細める。陽光は村の中央にある広場の時計台に直撃して、灯台のように町中に放射しているの。今まで村で暮らしていたときには、そんなことには気が付かなかった。山は大きすぎて見上げるだけの存在だったし、太陽の光はただ明るいということしか知らなかった。彼は暫く立ち止まって、その光景を目に焼き付けるの。そして小さく微笑んで、再び歩きはじめる。それから彼はもう村を振り返ることはなかった」

長谷川さんは徐々に文語調になり、熱のこもった言い方で喋りつづけた。

「青木くんが言ったみたいにね、私もすっごく不安だったの。でもこの話を読んで、なんか、旅に出るのもいいかもって。まあ根拠のない自信なんだけど」

長谷川さんの瞳に橙色の街灯が滲んでいた。僕はその光を見つめながら優しく微笑んだ。

「なんとなく、わかる気がするよ」

長谷川さんはこくりと頷いて進行方向に顔を戻した。

十字路に差し掛かり、僕たちは足を止めた。長谷川さんの家は道を左に曲がった先にあり、僕の家はもう少し坂を下ったところにある。じゃあね。彼女は小さく手を振って背中を向けた。白い制服は夜道に映えたが、一分と経たないうちに見えなくなってしまった。僕は港の方に向き直り、次の瞬間には走り出していた。埠頭の灯りをめがけて、全速力で坂を下っていた。風が鼓膜を叩く轟音の中で、意味のない言葉を叫び続け、自分の体がばらばらになるような錯覚を覚えた。海はすぐそこに迫っていて、既に足は埠頭のコンクリートを踏んでいる。肩に掛けた鞄を放り投げ、ボタンをもいでシャツを脱ぎ捨てた。コンクリートの縁を強く踏んだとき、翼は一気に大きく広がっていた。飛んでいる自分をイメージしながら、黒い海の先を見つめる。片方の翼が自分の仕事を忘れた瞬間、全身が傾いたが、もう一度イメージに集中して平衡を取り戻した。一瞬だけど、僕は飛ぶという感覚を知った。硬い羽毛に包まれた大嫌いな翼が、確かに風を捉えていたのだ。が、次の瞬間、僕は頭から水面に突っ込んでいた。真っ暗な海の中で必死にもがいたが、意外にも翼の浮力は強く、すぐに新鮮な空気を吸うことができた。僕は水面から顔を出して、ぷかぷかと浮かんでいた。僕は突然笑いだした。

町を振り返ると、不揃いな光が肩を寄せ合うように密集し、少し離れたところに灯台の巨大な灯りが宙に浮いているのが見えた。笑い疲れた僕は、岸に向かって泳ぎはじめていた。

作品の掲載に当たっては、原文通りを原則としています。

講評

旅人・大人になる前の恐れ、嫌悪、憧れ、焦燥、これらの鬱屈したアンビバレントな感情が支配する前半、幼馴染との別れから、港へ向かって走るたたみかけるような疾走感と真っ暗な海をついに自分の翼で飛んで旅人になる終盤まで、その発想、構成、描写、いずれも見事な作品だと感じました。立ちゆく旅人が外から見て懐かしくもどこか小さく感じる故郷の街、その街を照らす時計台や灯台などランドマークの描写もとても印象的でした。

（三菱地所株式会社　執行役員　横浜支店長　竹田　徹）